

平成23年度終了プロジェクト研究評価【総括評価】

研究課題名	達成目標・達成状況	評価	コメント
<p>初等中等教育における教育財政に関する調査研究</p> <p>[平成22～23年度]</p>	<p>[達成目標]</p> <p>初等中等教育分野における公的資源投入やその他の社会経済的な要因と教育達成との関連について、政策的な基礎となるエビデンスを提供する。</p> <p>[達成状況]</p> <p>○ 「全国学力・学習状況調査」や総務省の地方自治体データベース等を再集計し、児童・生徒、学校、市区町村といった様々な単位における教育達成やその他の変数間の関連性について定量的分析を行った。</p> <p>○ その結果、①就学援助比率が示すもの、②就学援助率と学力、学校の取組との関係、③学力及び学習状況の男女差とその経年変化、④学校運営関係変数と学校別平均正答率との関連性、⑤学力と市町村指標、⑥学力層別の学力達成の規定要因、⑦新体力テストとその他諸変数との関連性、について様々な示唆を得た。</p>	<p>高い成果を出した</p> <p>[A]</p> <p>・S：3名</p> <p>・A：10名</p> <p>・B：2名</p> <p>・C：1名</p>	<p>本研究所の利点を生かして全国学力・学習状況調査や新体力テストなどのデータを活用し、学力と相関の強い要因を分析しており、今後、新たな政策展開のきっかけを示唆している点で高く評価できる。</p> <p>今後、影響因子や学力層ごとの影響作用の状況などの分析をさらに精緻なものとするとともに、学校運営等の具体策の提言を見据えたさらなる分析が期待される。</p>

※評価については、以下の5段階により行った。

S：非常に高い成果を出した、A：高い成果を出した、B：やや高い成果を出した、C：やや低い成果だった、D：低い成果だった

研究課題名	達成目標・達成状況	評価	コメント
<p>大学の財務運営の在り方に関する調査研究</p> <p>[平成22～23年度]</p>	<p>[達成目標]</p> <p>国立大学法人において第二期の中期目標・中期計画に基づく大学運営が開始され、各大学のミッションを実現するための適切な財務運営の在り方が求められる中で、この分野における先進的な取組を進める英国の状況を分析するとともに、我が国の国立大学の財務運営の実情等についての実践的な研究を行い、これからの我が国における国立大学の財務運営の在り方の指針となる考え方やモデル等を提示する。</p> <p>[達成状況]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 英国の大学の財務運営の状況について調査・分析し、その特徴を明らかにした。 ○ 我が国の9国立大学についての事例研究を通じ、資源配分の基本ルール、収入資源や支出の配分の実態について分析を行い、今後の課題を整理した。 	<p>高い成果を出した</p> <p>[A]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ A : 8名 ・ B : 7名 	<p>我が国と英国の大学における財務運営の実情について、事例を基に分かりやすく整理され、多くの示唆が得られている。</p> <p>限定された事例であるため、全大学の中での位置付けは必ずしも明らかではないが、本研究の成果が、各大学で財務運営の見直しを図るきっかけとなることが期待される。</p>

※評価については、以下の5段階により行った。

S : 非常に高い成果を出した、A : 高い成果を出した、B : やや高い成果を出した、C : やや低い成果だった、D : 低い成果だった

研究課題名	達成目標・達成状況	評価	コメント
<p>学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究</p> <p>[平成21～23年度]</p>	<p>[達成目標]</p> <p>学校における持続可能な発展のための教育（E S D）の定着と充実に向けて、E S Dの成立要件、つまり、構成概念や学習指導で重視する能力・態度、学習指導の在り方（単元開発や教材開発）などを明らかにし、E S Dの指導に参考となる資料（事例を含む）を提供する。</p> <p>[達成状況]</p> <p>○ 最終報告書、その抜粋版、リーフレットを作成し、その中で、E S Dの成立要件（構成概念、E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度、学習指導の在り方など）を明確にし、実践の在り方を提示した。</p> <p>○ このことにより、E S Dを学校教育（教科以外の学校教育活動を含む）において構想し展開する上で有用な知見を提供できた。</p>	<p>高い成果を出した</p> <p>[A]</p> <p>・S：6名</p> <p>・A：6名</p> <p>・B：2名</p> <p>・C：1名</p>	<p>E S Dそのものの成立要件の整理等を行った上で、学習指導要領との関係や学習指導の在り方を事例を用いつつ整理するなど、学校における取組に配慮したものとなっており、E S Dを学校教育に導入することの学校教育政策全体にとっての意義付けが明確となった。</p> <p>今後の教育課程や学校における指導改善に向けて、一つの汎用的かつ効果的な手法を提案したものであり、今後、研究成果を基に、具体的な実践を学校現場に浸透させていくことが期待される。</p>

※評価については、以下の5段階により行った。

S：非常に高い成果を出した、A：高い成果を出した、B：やや高い成果を出した、C：やや低い成果だった、D：低い成果だった

研究課題名	達成目標・達成状況	評価	コメント
<p>高大連携を中心とした実験と思考力重視の入試研究</p> <p>[平成23年度]</p>	<p>[達成目標]</p> <p>実験と思考力を重視した大学入試の現状把握、高校での理科研究の実態と実験などを評価した大学入試に対する高校教員の意識調査、高大連携による実験と思考力を重視した「モデル授業」の実施を行い、新たな思考力重視の入試提案を行う。</p> <p>[達成状況]</p> <p>○ 学生科学賞等の受賞校の教員に対する質問紙調査を実施し、高校での理科の実験研究の実態、実験や思考力を重視した入試に対する指導教員の意識を明らかにした。</p> <p>○ 国立大学のAO入試などにおける実験と思考力を重視した入試についての実態を把握した。</p> <p>○ 高校と大学の教員が連携して、実験と思考力を重視した化学・生物・物理の「モデル授業」を実施した。</p>	<p>やや高い成果を出した〔B〕</p> <p>・A： 2名</p> <p>・B： 14名</p> <p>・C： 1名</p>	<p>比較的理科教育に熱心と思われる高校でも実験の機会が少ないことを明らかにするなど、高校での理科の実験の実態や思考力を重視した大学入試の現状などを明らかにした点は評価できる。</p> <p>一方で、研究期間が短かったこともあり、それぞれの達成目標間の関連が十分に図られておらず、また、大学入試の具体的な改善方策への示唆や高大連携の意義の実証的な根拠の説明などにおいて課題を残したと考えられる。</p>

※評価については、以下の5段階により行った。

S：非常に高い成果を出した、A：高い成果を出した、B：やや高い成果を出した、C：やや低い成果だった、D：低い成果だった

研究課題名	達成目標・達成状況	評価	コメント
<p>高等学校・大学におけるグローバル人材の育成に関する調査研究</p> <p>[平成22～23年度]</p>	<p>[達成目標]</p> <p>我が国の大学がグローバル化に対応した人材育成を行うために、どのように「国際化」を長期的に推進していくかを検討し、様々な大学評価活動で活用し得る指標を作成する。また、グローバル化の進展を展望した高等学校における取組の可能性について検討する。</p> <p>[達成状況]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 企業や大学へのインタビュー調査を通じ、企業が求めるグローバル人材の資質・能力や大学・大学院教育への期待などを明らかにした。 ○ グローバルに活躍できる人材の育成を目標とする大学において有用な指標として、「国内外に開かれた大学システムに関する指標」及び「大学におけるグローバル人材育成に関する指標」からなる指標群を提示した。 ○ 高等学校について、国際高等学校を対象とした聞き取り調査を行うとともに、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi）事業の効果について検証した。 	<p>高い成果を出した</p> <p>[A]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・S： 7名 ・A： 7名 ・B： 1名 	<p>25社にのぼる企業訪問調査を踏まえ、大学における人材育成の意義を再確認するとともに、大学が活用し得る体系的な評価指標を提示したことは高く評価できる。指標が求めている水準に至るまでのステップや、学部等の特性への配慮が明確ではないという課題はあるが、各大学がグローバル人材育成の取組を進める上で本研究の成果が活用されることが期待される。</p> <p>また、SELHi事業の検証は、今後研究指定校等の成果を広く普及する上で一つの有効な手法を提示したといえる。</p>

※評価については、以下の5段階により行った。

S：非常に高い成果を出した、A：高い成果を出した、B：やや高い成果を出した、C：やや低い成果だった、D：低い成果だった

研究課題名	達成目標・達成状況	評価	コメント
学習成果アセスメントのインパクトに関する総合的研究 [平成21～23年度]	[達成目標] 経済協力開発機構「高等教育における学習成果調査」(OECD-AHELO)の導入が、大学にいかなる意図的・無意図的影響を及ぼすのかに関する知見を提供する。 [達成状況] ○ 10か国・地域の国際比較を通じ、学習成果に基づく大学教育の質保証アプローチを大きく二つのタイプに分類し、それぞれについて、その特徴や、学習成果アセスメントのインパクトを整理した。 ○ OECD-AHELO(工学分野)のこれまでの取組を踏まえ、その意義や導入のインパクトを整理した。	やや高い成果を出した[B] ・A: 5名 ・B: 11名	各国における質保証システムの動向について、丁寧に把握・説明を行っており、また、それぞれの質保証アプローチの意義を明確にした点なども評価できる。 一方で、各国調査を通じた全体としての総括や、我が国における大学教育の質保証についての提言などの面では課題を残したと考えられる。

※評価については、以下の5段階により行った。

S:非常に高い成果を出した、A:高い成果を出した、B:やや高い成果を出した、C:やや低い成果だった、D:低い成果だった